

太田市住民協議会（第4回）
議事概要

太田市



第 1 分科会

| | |
|----------|------------------------------|
| 区分 | 第 1 分科会 |
| コーディネーター | 伊藤伸 |
| 日時 | 2017年10月28日(土) 14時30分～16時10分 |
| 場所 | 太田市役所本庁舎 1階 1A会議室 |

主な論点

「しなければならぬ」について

- コ) 改善提案シートの中間とりまとめの中で分類した「運動習慣」という課題に対して、地域の見守りなど、相手にどうするかという意見が多くみられるが、自分にどうするかという意見がもっとあっていいのではないかと思ったがいかがだろうか。
- 委) 昨日、地域の踊りの発表に行ってきたのだが、これまで踊りの経験もなかったし、人前で踊るのは恥ずかしいと思っていたけれど、踊ったら思いの外すっきりした。積極的に参加することは大事だと感じた。
- コ) 踊りをしようと思ったのは何がきっかけとなったのだろうか。
- 委) 地域の役員になってしまったから仕方なかった。
- コ) 第2回の協議会で、健康づくりについて「楽しい」、「ながら」、「しなければならぬ」というキーワードが出たが、このケースは「しなければならぬ」に近い。しなければいけないという環境をどうつくっていくのがいいだろうか。
- 委) リタイア世代の男性の社会参加についても関わってくるが、奥さんが無理やり連れて行けば、旦那さんも交流の場に参加するようになるのではないか。

「楽しさ」について

- 委) 知人の代わりにスバルマラソンに出てから、トライアスロンやスキーなどスポーツをするようになった。大会の予定を先に入れてしまうと、動けるようになる。楽しみにしてしまう。
- 委) 楽しさは大事。
- コ) 楽しいを自分からどうつくれるだろうか。
- 委) まず興味を持つこと。ただ、あと一歩が難しい。住民協議会のようにコーディネーターが必要だと思う。行政にはコーディネーターを育ててほしい。

相談の場について

- 委) 悩みを話し合える場が必要。行政でなくむしろボランティアやNPOなどがこの役割を担うのではないだろうか。
自分の体験をシェアすることによって解決に向かう事があるのではないだろうか。
- 市) 精神やアルコール患者のグループなど健康に関わるいくつかの任意のグループが市内にあることを把握している。
- 委) 私も住民協議会に参加してから地域の中でサークルを立ち上げた。悩みについて聞

いたり、そこから例えば医者を勧めたり行政を勧めたりできればと思っている。市役所に行くのはハードルが高いので、やわらかい方向で取り組んでいる。

委) 行政でも相談に乗ってくれる課があるが、行くまでにハードルが高く、個人となかなかつながりにくい。

委) 物理的な集まる場があればと常々感じている。例えば行政センターや市役所のロビーなど広い場所があるのに、誰も使わない。もっと有効活用すればよいと思う。

委) 太田行政センターは学生が占拠していきにくい。

コ) 今日も寄ってきたが、美術館図書館は人が多かった。カフェもあって若者も行きやすい。

委) 例えばお洒落なレストランがあるなど、それを目的に行くようなものがあればよいのではないか。

委) 聞きたいこと、話したいこと、いろいろな年齢の人がいる。そういう場が欲しい。

けん診について

コ) けん診についてはいかがだろうか。受診率と死亡率には相関関係があるといわれている。

委) 子宮がんの検診などのお便りをいただくが、足が遠のいている。3年くらい行っていない。

委) 健康診断を受けないと職場で仕事ができない。

コ) 企業に向けた取組みはできないだろうか。他の自治体で、できる限り健康診断を受けよう市から文書を出し、社員に配布してもらっているというところがあり、受診率が上がっている。

委) 病気があると分かるのが怖く、けん診から足が遠のいてしまう。

委) けん診とイベントを抱き合わせるのはどうだろうか。そうすると楽しさが加わる。

コ) 市のけん診受診率は何%くらいあるのだろうか。

市) 市のがん検診受診率は20%台である。毎年でなくてもいいと考えている人や、子どもがいて忙しいという人がいるのではないかと思われる。

委) 学生はけん診を受けているのだろうか。若い頃から行く習慣があれば、後々の意識も高くなっていくのではなだろうか。

委) 大学で実習があるので受けなければならないので受けた。(女子大学生)

交通について

- 委) 交通についても以前から話が出ていたが、おうかがい市バスは一週間前に予約をしなければならぬ。予約がすぐいっぱいになってしまう。
- 委) ここのところ混雑して、予約が取りにくくなっていると聞いている。周りからは「実際に行くべき時間よりずっと早く着いてしまうし、買い物に途中降りることもできないので、タクシーを使っている」という声も聞こえてくる。
- コ) おうかがい市バスの利用状況などを確認したい。
- 市) おうかがい市バスは利用対象者が65歳以上で各行政センターまたは交通対策課へ申し込み、登録が完了すると利用できるようになる。基本的には電話予約で、利用の一週間前から前日までに予約をお願いしている。なかなか電話が繋がらないこともあるようだ。
- 委) おうかがい市バスの普及は、高齢者の免許の返納にもつながるのではないかと。
- 委) 私が免許返納したときも、とても不安であった。5年前に返納したが、近くのコンビニも遠くに感じるし、何をすることも動きが制約される。
- 委) バスよりも自由度の高いタクシーの方がいいのではないかと。
- 市) 障がい者用の福祉タクシーの制度がある。利用券は1枚500円で1年間で24枚まで利用できる。
- 市) 交通対策課では、今年度、地域交通網形成行動計画を策定し、市バス路線の再編を検討している状態である。ここでも出たような問題意識は市でも共有している。

総括

分科会会長総括

- ・ 世代や環境など人それぞれ直面している課題は違う。個人は、何をすべきか自分で知識をつける必要がある。行政には、そのサポートをしてほしい。具体的には世代や個性を捉えた情報発信をしてほしい。また、地域には、個人と行政をつなぐ柔軟なものであってほしい。
- ・ これまでの議論の中で、世の中にある支援やコミュニティが点と点で存在していることがわかった。この点同士を結ぶ線が必要だが、行政が作る制度だけに頼るのではなく、個人の思いやりや気遣いも不可欠である。一人一人が太田市に所属しているという意識を、制度に寄り掛かるのではなく、寄り添っていければと思う。
- ・ これまで地域のことに関心がなく、自分のこととして考えていなかった。短い期間だったが、自分のこととして考えられたことは貴重な経験であった。

コーディネーター総括

- ・ 第1分科会では、心の健康が保たれていないと外に行く気にもならないし、身体の健康につながらないということで、まずは心の健康について話し合った。
- ・ 身体の健康については健康診断について話し合った。太田市のけん診の受診率は全国平均からすると低いようである。行政側でもその要因を探る必要があるし、個人レベルでもけん診が自分のためだと捉える必要があるだろう。
- ・ 外に出ることが健康につながるということで、交通のことについても話し合った。免許返納後に孤立感を感じるという話も出ていたので、公共交通については、健康づくりという点でも今後の行政課題だろうと考えられる。
- ・ いままでの話で共通していたのは、「ながら」「楽しさ」「しなければならない」の3つのキーワードで、例えば、けん診についても楽しさと結びつけることで受診率が上がるのではないかという話が出た。

第2分科会

| | |
|----------|------------------------------|
| 区分 | 第2分科会 |
| コーディネーター | 山根晃 |
| 日時 | 2017年10月28日(土) 14時30分～16時10分 |
| 場所 | 太田市役所本庁舎 6階 1A会議室 |

主な論点

若い世代との関わりについて

- コ) 改善提案シートの中間とりまとめに「世代間交流が少ない」という課題がまとめられている。子供の健康や子ども達との関わり方について、少し話を聞いてみたいと思う。
- 委) 最近、妻が交通指導員を始めた。朝の通学時間に交差点などで子供の誘導をしているのだが、週に1回程度とはいえ、地域の子供とつながりができたようだ。旗振り当番に出てくる子供たちの親とも自然と会話が生まれるようで、普段仕事が忙しくてなかなか会えない層の人とも話すきっかけになっている。
- コ) 役というとしんどくなってしまうが、きっかけという点ではいいかもしれない。子供にいきなり声をかけても変な人になってしまう。自然発生的に関わるということはなかなか難しい。
- 委) 私は阿波踊りのグループに参加しているが、グループの構成をみるとお祭りが好きなご年配の人が多し。若い人はなかなか来ない。
- コ) お祭りなどイベント事は子供が一番楽しみにしているから、子供に連れられて親も参加するというパターンがあるかもしれない。しかしながら、娯楽が少なくオンオフがはっきりしていた昔に比べると、今はテレビがあったり、ゲームがあったり、ネットがあったり、ずっとオンの状態が続いているので、お祭りなどの特別感が薄まっているかもしれない。
- 委) 親が、自分が経験したことと同じことを子供にも経験させて、経験を継承させるということがあると思うが、今は親が忙しすぎて、その流れが途切れているようにも感じる。
- コ) 子供にどれだけ体験させられるかということには経済的格差も出てきている。私も行政で子どもの貧困対策に携わっているが、貧困層の人たちは地域行事なども含め外に出ていかない傾向がある。
地域とつながりが深い子供は自己肯定感が強い。地域行事などの中で周りの色々な人に褒められたり、怒られたりとかする。家庭で親の躰しか受けなかった子供に比べ色々な経験をさせる。
- 委) 最近、親が危険を伴うようなことを極端に避ける傾向が強くなっているのではないだろうか。怪我を恐れて何もさせないと、逆に大怪我につながることもある。
- コ) お祭りもそうかもしれないが、何かを作り上げたり、準備をしたりする作業は、人とのコミュニケーションが生まれるし、大人になる上で必要なことを学ぶ場にもなる。

地域への参加について

- コ) これまでに相談の種類について話題に挙げたことがあるが、行政への相談という
と、納税の相談とか、福祉の相談とかある程度目的がはっきりしている場合が多い。
しかし、そうでない相談もある。何となく話しているうちにガス抜きされたり解決
されるような相談は、普段の人付き合いとか、地域ぐるみのコミュニケーションと
かそういう環境があるかどうかに関わってくるが、皆さんの周りではどうだろうか。
- 委) 地区の運動会など、一年に一回くらいはこの人に会うよねという環境があるが、こ
ういう何となくつながっている感覚は大事だと思う。
- 委) 半強制的くらいの方が地域への参加という点ではいいのではないかな。ある程度の決
まりやルールがあつての社会なので、そこをなんでも個人の自由とってしまうのは
疑問に思う。
- コ) 自発的にやってもらえるならそれに越したことはないけど、それが難しい時に、自
分でない誰かがやってくれるということでもいいのか。特に、新しくやってきた人
たちにとっては、昔からいる人たちに加わるというハードルもあり、なおさら自発
的に動くことは難しいように思うが、その辺りはどうだろうか。
- 委) 私の地域だと、一度地元を離れた人が U ターンで戻ってきて、親の土地の一部に
家を建てることもあるが、隣組には参加しないケースが多い。親が参加しているか
ら自分たちはいいだろうという感じになっている。そうすると、付き合いがないの
で、近所で見かけても誰だかよくわからない。50代や60代になって親世代がい
なくなったときに、初めて隣組に参加しても孤立化してしまう。

地域とのつながりが失われることで困るのは誰か

- コ) このまま住民と地域の関わりが薄くなっていくと困るのは誰なのだろうか。また、
困るタイミングはいつなのだろうか。
- 委) 現状では、困っていると実感していないのではないだろうか。問題意識を持ってい
ない人が多いからこそその現状なのかもしれない。
- 委) 若い人にとっては、面倒くささの方が勝るのかもしれない。
- コ) 今の現役世代の人たちが困ることを実感していない。いま地域と関わりを持って
いる人も自分の子どもや孫の世代が困るかもしれないという事を意識して、諦めない
で若い世代に声をかけ続けていくことが求められる。
- コ) 若い人の意見も聞いてみたいが、いかがだろうか。
- 委) 先日、台風が来て家の前の道が冠水してしまった。ツイッターなど SNS 上でしか
情報を得られなかったが、近所の人とのつながりがあればもっと身近な情報も得ら
れたかもしれないし、仮に非難となったときにも協力し合えるだろうと実感した。

- コ) 誰が困るかという事でいうと、つまるところは行政が一番困るのかもしれない。地域でクリアしていたことがクリアできなくなった時に、その矛先が行政に行く可能性は高いが、行政でやれることには限界がある。
- コ) 行政の人たちはどう感じているだろうか。
- 市) 私は保健師だが、以前は各地区の行政センターに保健師が配置されていたと聞いている。今は市内4カ所の保健センターに集約されている。行政もシステムチックになっており、地域の細かいところまで手が届かなくなっている。地域のつながりが薄くなると困ることが出てくると思う。
- 委) 行政でやりきれないのには目に見えている。地域との関わりについては、皆が興味を持つことから突破口を開けばいい。一つうまくいくと、じゃあ次もとなっていく。いきなり大きな枠組みでとらえることは難しいから、小さいことを小さいグループで合意形成していくのもいいのかもしれない。そういう活動をつなげていくことで地域とのつながりが作られていくのではないだろうか。

総括

分科会会長総括

- ・ 地域づくりについて主に話し合ったが、子供などとの世代を超えた交流という点では、通学時の交通指導員や体協、育成会など地域の中にある役割を通じてコミュニケーションが取れるという話が出た。
- ・ 子供にとっても小さいころから地域に参加することが本人の経験値になるし、地域にとっても経験が受け継がれることでプラスになるのではないか。

コーディネーター総括

- ・ 子供の健康ということで話を進めたが、子供の健康そのものというよりも、地域の中でどこにどんな子供がいるのか把握するという話に落ち着いたように思う。いままでは育成会や地区体協、隣組で把握していたことが薄れてきていて核家族の若い世帯が孤立化しているという課題が浮き彫りになった。
- ・ 地区によって活動に濃淡があるが、地域の活動が失われつつあるところでは、失われてしまったからといって諦めないで、小さいことを小さいグループで一つずつ合意形成していくことで地域のつながりが生まれるだろうと話した。
- ・ 第2分科会では、阿波踊りのグループに参加している人がいてその話をしたら、他の委員さんが興味を持ってぜひ参加したいという事になった。この分科でもそうであったように経験を共有できるような場が必要ではないか。気付きを得るような場があると住民自治につながっていくのだろうと思う。

第3分科会

| | |
|----------|------------------------------|
| 区分 | 第3分科会 |
| コーディネーター | 石井 聡 |
| 日時 | 2017年10月28日(土) 14時30分～16時10分 |
| 場所 | 太田市役所 6階 6A会議室 |

主な論点

けん診について

- 委) 最近では病院へ行っても血圧は自分で計るし、問診でも自分から聞かないと医者は教えてくれない。皆さんが病院に行った際もこんなのか聞いてみたい。
- 委) こちらから聞かないと教えてくれない印象はある。
- 委) 人によって症状が違うから聞きながらになるのではないか。
- 委) 医師が何も言ってくれないのであれば、問診の際にでもどんどん聞くべきである。
- コ) 医師は患者側から積極的に聞かないと診断してくれないとのことであるが、自分の健康は自ら管理するという意識が重要になってきていることがうかがえる。

食について

- コ) 第3分科会ではあまり出ていなかった分野であるが、改善提案シートの中間とりまとめに食についての項目がある。思うことなどあれば聞かせてほしい。
- 委) 中間とりまとめでは「1日3食」との意見があるが、自分の経験として幼いころを思い出すと朝食をあまり食べていなかったように思う。人によって朝食を食べられない要因は様々だと思うが、私の場合は夜更かしすることが多く、必然的に朝起きるのが遅くなり、朝食をとる時間が持てなかった。3食を食べることを考える前に早寝早起きなど生活習慣を見直すことが必要と感じた。
- 委) 医者によっては朝昼をきちんと食べ、夜を減らすという考え方もあるようだ。また、問診などで話をすると、加齢により運動量が減ることから運動量に合わせた食事が必要との指導もある。
- 委) 私は1日3食とりたいと考えているが、昼は勤務中の対応で時間が取れなかったりすると、夜にたくさん食べてしまう。夜も帰りが遅いことが多く、遅い時間にたくさん食べることで翌朝は食べるができない。結果として1日1～2食となってしまう。
- 委) メディアから情報を得て、野菜を食べてから肉を食べるようにしている。
- コ) 健康情報にもいろいろあって、情報と情報の間には矛盾していることもある。どこを信じたらいいかという問題がありそうだ。
- 委) 栄養士の意見などを広報などで知ることができるとありがたい。
- 委) 血圧が130を超えて良くないことはわかる。このままダメな状態が続くとどうなるか、下げるにはどうしたらよいか、塩分が原因なのか、これが尿酸値の場合だとどうなるか、こうしたことを教えてもらいたい。

- コ) こうしたことは保健師に聞けば教えてくれるものだろうか。
- 市) 数値的な話で言えば、健康診断の結果は1回で終わらせずデータで取っておき、自分の体の状態を経年で見ることができるようにしておくことが重要である。
- コ) 私が暮らす逗子市では、市が主催する60歳以上の男性限定の料理教室があるのだが、毎回募集するとすぐに定員となる。本人からの申し込みよりも奥さんや娘さんが申し込むことが多いのも特徴的であるが、講座終了後にサークル活動として残っていくことが特徴的である。健康的な食事を意識するとともに、定年退職後の活動の場の広がりにも貢献する事業だと思っている。

情報について

- コ) 様々な情報があって収集や選択が難しくなっているという話が出た。また、もっとわかりやすい形で広報等で情報が受けられればという話や、医療に関するリスト作成という話も中間とりまとめでは出ている。
- 委) ぐんま広報の10月1日号を参考に持ってきた。「スポーツで群馬を元気に」というテーマで構成されており、内容も非常に良くできていると思う。ただ残念なのはこうしたものは興味がないと目にふれない。
- コ) 太田市の広報は新聞折り込みで入ってくるとの話が以前あった。新聞をとっていない若者はコンビニなどで入手可能とのことである。他に入手方法はこういったものがあるか。
- 市) 以前はメール便で新聞をとっていない家庭へ届けていたようである。
- コ) 郵送にはコストもかかる。広報紙1部あたりの生産コストに見合っていない。全ての世帯にどう届けるかという課題もあるが、市の広報紙をどう活用していくか、という議論は必要だと思う。
- 委) コンビニに広報紙が置いてあることを知らなかった。
- 委) 私も埼玉県から転入してきたが、広報紙がコンビニにあることは知らなかった。転入時にこうした情報があれば助かると思う。
- 委) 高校生は広報紙を知っているか。見たことはあるか。
- 委) 新聞と一緒にリビングにあるとは思いますが、見たことはない。(男子高校生)
- 委) 広報とは別に地区だよりというものもある。私が住んでいる地区ではポストイングされるので全世帯に配られていると思う。
- コ) 友達付きあいから情報が入ることがある。口コミの力、今風にいうとシェアだったり拡散だったりする力は思った以上に強い。逗子市では規模が小さいこともあり、

市民全体に流す情報に加え、地域で拡散する能力の高い人に絞って情報を流すことがある。

運動習慣・健康意識について

- コ) 以前出た意見で元体育教師などが地域の運動リーダーとして活躍していればと
いったお話があったが、場所やイメージなど聞かせていただきたい。
- 委) 特に具体的なイメージは持っていないが、太田市は健康を重視しているまちであり、
運動・スポーツにも力を入れてきた実績があることから、そうした体験や教育
を受けてきた人達が地域で率先して活動していれば効果的な取り組みとなると
思い発言した。
- 委) 地域ごとのスポーツ推進委員のような人が必要である。
- コ) 他市で言う健幸サポーターのようなイメージであろうか。
- 委) 多くの人にとって学生時代は部活が盛んであったかと思う。部活により経験した
スポーツにおいて何かできるのではないか。年を重ねるにつれそうした運動習慣が
途切れ、今に結び付かないのはもったいないことだと感じる。
- 市) 市内にはいろいろな施設があるが需要も多く不足しているのが現状である。市民
の運動熱の高まりに工夫をもって対応していきたい。

総括

副分科会会長総括

- ・ これから高齢社会になっていく中で、自分自身の健康について関心があったので参加したが、世代を超えた話し合いができたことで、自分だけでなく、若い世代の人たちを育てるためにも貢献していかなければならないと実感した。
- ・ 協議会を通して世代間の交流を实践でき、気づきの場となったことがよかった。
- ・ 住みやすい市とするためには、私たちも意見を言っていかなければいけないという事が分かったので、今後は市の広報紙を熱心に読むなどして、市政のことをよく知っていこうと思う。

コーディネーター総括

- ・ けん診の際に、自分から積極的に質問しないと医者からアドバイスをもらえないという意見が複数出た。これは、自分の健康づくりに関して、自分自身が一番わかっているわけではなくて、自分が主体となって関わっていかなければならないということの意味しているのだろうと思う。

委) : 委員、コ) : コーディネーター、市) : 市職員

- ・ 行政側としても情報発信の仕方などいくつか気づきがあったと思うが、こうした行政側の気づきは、日常生活から感じる課題を色々な背景をもつ人が集まって話し合ったことで得られたものである。行政に一方的に提案するのではなく、個人や地域の役割も踏まえて一緒に考えていくという姿勢が今後も必要になるのだろうと思う。